

# 日本書紀α群における去声字の分布に基づく 上代日本語のプロソディーの検討<sup>1</sup>

なかざわ こうへい  
中澤 光平 (東京大学 国語研究室 助教)

koheinakk@12.alumni.u-tokyo.ac.jp

## 1. はじめに

本発表は、『日本書紀』(以下「紀」) α群の万葉仮名の去声字の分布に基づき、上代日本語のプロソディー、具体的には音節長について検討することを目的とする。

## 2. 先行研究

本節では、「紀」α群の去声字に関する先行研究を整理する。

### 2.1 日本書紀α群原音依拠説

森博達(1977)は「紀」を巻14~19, 24~27のα群, 巻1~13, 22, 23のβ群に分け、α群の音仮名はβ群に比べ、声母(子音)と韻母(母音)の選択性・統一性があることを主張した。例えば、「カ」に用いられた音仮名は「紀」歌謡全体で12種あるが、α群では主に見母[k-] 歌韻[-a]の字(=[ka])が主に用いられ(84字中82字), [可][kʰa], [伽][gia]は1字ずつのみである。対してβ群では、[ka]以外にも、溪母[kʰ-]や曉母[h-], 麻韻[-a]や介韻[-ei]の字が見られ、α群と比べ統一性がない。他の仮名でもこのような選択的傾向がα群に見出され、森(1991)は、β群の仮名は倭音(=日本漢字音)に基づいているのに対し、「α群では直接中国原音に依拠して仮名が表記されている」(p.17)として、「α群を【中略】中国人が著わし【中略】β群を日本人が著わした」(p.163)と結論付けた。

### 2.2 「紀」音仮名におけるアクセントの反映

高山倫明(1981)は「紀」古写本の声点と漢字の原音声調を比較し、特にα群において、両者に対応する傾向にある歌謡が多いことを指摘した。巻24の109番と110番歌謡を例として示す。(平とLに下線を、上・去とHに上線を引いた。Fは斜線とした。)

109番 波魯波魯你 渠騰曾枳舉喩慶 之麻能野父播羅 (岩崎本に拠る。110番も同じ)  
写本声点 LHLHH LL)F)H)H)H)H) LLL)H)H)H)H) L (岩崎本に拠る。110番も同じ)  
原音声調 平F平平上上 平平平上上上去去 平平平上上上去平 (万葉仮名の声調)

110番 烏智可柁能 阿娑努能枳々始 騰余謀佐儒 倭例播禰始柯騰 比騰曾騰余謀須  
写本声点 H)H)H)H)H) LL)H)H)H)H) LL)L)H)L) L)H)H)H)H)H) HL)F)H)H)H)H)H)  
原音声調 平去上上上平 平平上上上上上 平平平去平 平去去上上上平 上平平平平平

109番歌謡では音仮名原音声調の平声が声点のLとFに、上声と去声がHに対応し、110番歌謡でも[烏], [能](1字目), [須]を除いて対応している。高山は上代日本語のアクセントについて具体的な言及を避けているが、森(1991)は、「一部の歌謡における凹凸パターン的一致率の高さからみて、従来手がかりのなかった奈良時代のアクセントも、平安時代

<sup>1</sup> 本研究は研究活動スタート支援「淡路方言の系統の解明と西日本方言の区画の再検討」(19K20801)の成果の一部である。

と大差がなかったものと推測」(p.138) している。

### 2.3 「紀」歌謡音仮名における上声字と去声字の違い

高山(1982)は、高山(1981)ではまとめて扱っていた上声と去声の違いを示すものとして、歌謡の音仮名における〈<sup>上声</sup>/<sub>去声</sub>〉の比率(述べ数)を検証したところ、 $\alpha$ 群は全巻で1以上(平均1.54)、 $\beta$ 群は全巻で1未満(平均0.40)となっていて、 $\alpha$ 群では上声字優勢、 $\beta$ 群では去声字優勢という傾向を発見し、森(1977)の区分論を支持する形で、歌謡の音仮名の選択に声調もある程度考慮に入れられていた可能性のあることを示した。

この結果に対して森(1991)は、「 $\alpha$ 群の基づいた唐代北方音でも、漢音の声調【=声点の「調値」】と同じように、去声が顕著な上昇調だったのだろう」とし、「おそらく、 $\alpha$ 群の表記者は、日本語に上昇調音節が希少であるという漠然たる印象をもち、無意識のうちに去声字の使用を控えたのであろう」(p.141)と述べている。

高山(1981)ではH点に上声、去声をともに対応させていたが、両者には「さしたる傾向差は見られない」(高山1983:6[21])として、 $\alpha$ 群内部での上声と去声の分布差、機能差については認めていない。奥村(1995)も「上声字と去声字との現われ方【中略】比率にほとんど差がない」(p.51)と述べる。

頼(1951)のように、中古音の上声は高平調に、去声は上昇調に近かったと推定されていて、調値のみで言えば、上声のほうがH点を表すのに適切と考えられる。

森(2003)が主張するように、子音、母音の一致よりアクセントの一致を重視した仮名([娑],[美])が $\alpha$ 群にあり、アクセントに対する意識が高かったと推測され、上声と去声の使い分けが「漠然たる印象」によって「無意識のうちに」行ったとは考えづらい。

### 2.4 「紀」歌謡音仮名における去声字の分布

中澤(2011)は、 $\alpha$ 群歌謡を語で分割して万葉仮名の声調の分布を調べた結果、去声字が語末に顕著に現れる(364字中167字)ことを示した(平声字は1210字中275字、上声字は627字中175字)。中澤(2011)はその要因を語末の長さ(長呼)によるという仮説を提唱し、去声と長さの対応について、漢訳仏典の梵漢音訳以外にも『舊唐書』(945年成立)

「列伝」巻198におけるアラビア語音訳に同様の傾向があること<sup>2</sup>や、語頭での $R > H$ 、 $F > H$ というアクセント変化(「先づ」 $RL > HL$ 、「虹」 $FL > HL$ )に対して語末のFは現代の近畿方言でも「虻」、「声」、「鍋」、「蛭」などの2拍名詞第5類<sup>3</sup>で保持されていることを、仮説を支持する材料として挙げた。

### 2.5 先行研究の問題点

中澤(2011)の主張するように、語末の去声字が長さ(長呼)を表すとすれば、語末以外の去声字も同様に長さを示すものなのか、それとも何か別の機能があるのか、この点については論じられていない。そのため本発表では、語末以外の去声字の分布を検討することで、「紀」 $\alpha$ 群の去声字の機能についてさらなる検討を試みる。

## 3. 「紀」 $\alpha$ 群の去声字のさらなる検討

本節では、先行研究が言及していない「紀」 $\alpha$ 群の去声字の分布、機能について検討する。

<sup>2</sup> 去声字が用いられていて、かつ対応する語が比定できた例のみ挙げると、[大食] 去入 Tājīk, [末換] 入去 Marwān, [迷地] 平去 Mahdī, [牟栖] 平去 Mūsā, [俱紛摩地那] 平平平去平 jabal (al-)Madīna, [噉密莫末膩] 上入入去 ʔAmīr (al-)muʔmini(n)と、全て長母音に対応している。

<sup>3</sup> 金田一(1974)。これらは語末にF点が差されていて、現代の近畿方言でもLFと発音される。



d.	「匠」 <small>タクミ</small>	〔柁俱彌〕	上平平	→	〔隋俱彌〕	平平平	(14, 78)
e.	「黒駒」 <small>クロコマ</small>	〔矩盧古磨〕	上平上平	→	〔俱盧古磨〕	平平上平	(14, 81)
f.	「組垣」 <small>クミカキ</small>	〔矩瀾笮枳〕	上平上上	→	〔俱彌柯枳〕	平平上上	(16, 90)
g.	「…竹」 <small>タケ</small>	〔娜開〕	上平	→	〔囊開〕	平平	(17, 97)
h.	「裂手」 <small>サキデ</small>	〔佐基泥〕	去平平	→	〔作基泥〕	入平平	(24, 108)
i.	「下り」 <small>クダリ</small>	〔矩娜利〕	上上去	→	〔俱娜梨〕	平上平	(26, 120)

(1) を見ると、声調の交替に上声→去声→平声という傾向があることに気付く。特に、上声→平声の組が多い。声調の交替する音節は全てL点に対応し、平声が本来の対応と思われるから、非平声字はアクセント以外の要素を表していると考えられる。そうであれば、初出時に、プロミネンスを置いた読み方(詠み方)がなされた可能性が考えられる。唐代の慧苑の音訳字では上声字を(第2)強勢の来る次末音節(=penultimate)に当てている(水谷1968)。

『元和韻譜』(806-820?)の「上聲厲而擧」や『康熙字典』(1716年)にも引かれる詞(唐末成立か)の「上聲高呼猛烈強」と合わせれば、唐代には上声は高く(「擧」,「高呼」)かつ強い(「厲」,「猛烈強」)調値だったと推測される。上の例も、場合によっては初出時に強く(あるいは高く<sup>5</sup>)読まれたのを、α群表記者が上声と聞き取ったのではないだろうか。そうであれば、これは歌謡の旋律を反映する要素と考えられる。上声が高さ、強さのプロミネンスを表すとすれば、去声は長さを表していた可能性がある。

重出語は、複調字の声調認定にも関連する。〔瀾〕(平声/上声)は〔矩瀾笮枳〕:〔俱彌柯枳〕の対から、〔彌〕(平声)と書き分けたと考えられ、〔瀾〕は上声字として扱われたと考えられる。〔姁〕(平声/上声)はH点に3例、L点に5例対応し、声点から考えれば〔阿〕(平声)と同様平声字かとも思われるが、〔姁枳豆〕LLF「蜻蛉」の例からは、L点と対応する場合は初出語の強さ(または高さ)に対応し、〔姁〕は上声字として扱われた可能性もある。

### 3.3 去声字の連続

去声字は1語内で複数現れるものが多いが、地名や枕詞には、〔據暮利矩能〕去去去上平(14, 77), 〔逗摩御慕屢〕去平去去去(16, 94), 〔柁箇播志須擬〕上去去去上平(16, 94)のように、去声字が3字連続するものがある。上の地名、枕詞の例では去声字とH点の対応率は高くない(H点には4字、L点には6字対応)ので、高さとは別の何らかの音調動態を表したものと思われる。3.2と同様に、地名や枕詞が歌謡内で特殊な詠まれ方をしていたという可能性もあるが、地名などの固有名詞は、母語話者であっても知らない場合に聞き取りに苦労することを考えると、想像力を逞しくすれば、地名や枕詞など、α群表記者が聞きなれない単語を、意図的にゆっくり読んだ結果、去声で長音表記されたか、または1音ずつ切って読み上げたためにアクセントとの対応が見られないのではないかとと思われる。そうであれば、去声字が長さに対応している可能性を示唆するものと言える。

### 3.4 1音節語

1音節語に用いられた語の大部分は非自立語の助詞34例と助動詞22例である。これらの語における去声字の機能について考察する。

<sup>5</sup> 岩崎本には〔伊比爾惠弓〕「飯に飢て」(22, 104)が重出するが、初出ではHHHFH, 2度目ではLLLFHという声点が増えられているのも、この交替と関係があるかもしれない。ただし、岩崎本の例は音仮名に交替は見られず声点が交替し、声調の交替する例とは関係が逆になるが、これが岩崎本加点者の直接聞いた音調動態が反映された結果だとしたら、岩崎本が差点の可能性が高まると考えられる。写点である図書寮本では同歌謡に声点の交替は見られない。

α 群歌謡において去声字が用いられた 1 音節の助詞は (2) のとおりである。

- (2) 「は」 17 例 「も」 5 例 「や」 3 例 「ゑ」 2 例 「か」 1 例 「が」 1 例  
 「ば」 1 例 「ゆ」 1 例 「え」 1 例 「て」 1 例 「よ」 1 例

去声字が複数用いられたのは「は」 17 例, 「や」 3 例, 「も」 5 例, 「ゑ」 2 例である。このうち, 「ゑ」は〔衛〕なので除外するとして, F 点で現れる「や」, 「も」と並んで「は」にも複数用いられている点が注目される。「は」, 「や」, 「も」はいずれも係助詞としても用いられる点で共通する。「は」は格助詞の「が」, 「に」などと同様に平安アクセントでは H 点で表記されるが, 上代には「や」, 「も」と同じく「は」も下降調あるいは長めに発音されたのではないだろうか<sup>6</sup>。後に, 格助詞に準ずる扱いを受けるようになったため<sup>7</sup>に, 平安時代には H 点で表記されるアクセントに変化したのではないか。

現代方言でも, 「は」は「が」・「を」とアクセント・長さのいずれも同じ振舞いをし, 違いは観察できないが, 「は」と去声との対応は, 他の係助詞と同様に発音された痕跡を示すものの可能性がある。

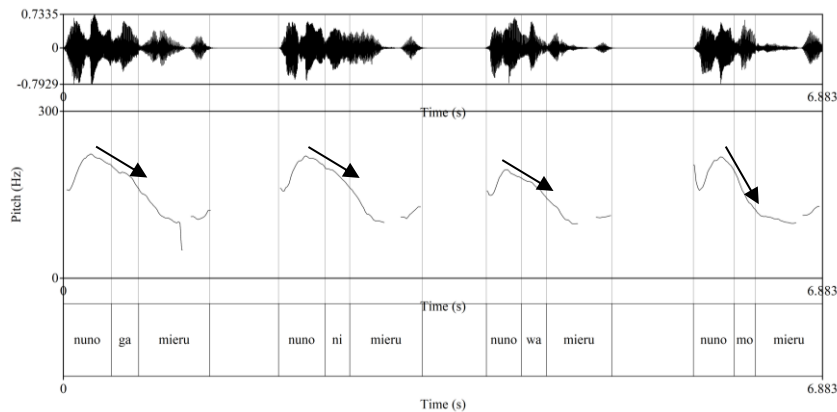


図 1 淡路方言における助詞「が・に・は・も」の発音 (南あわじ市, 1940 年生男性)

また, 未然形に接続する一部の助動詞は, アクセント形から考えて, 前の語と一体化し事実上語末として機能していたと思われる。例を (3) に挙げる。

- (3) a. 阿娑羅儂陀陀伺 「し」 平平平上平平去 LLHHLLLH (14, 75)  
 b. 俱伊播阿羅理茹 「じ」 平平去平平去上 LLHLLHL (27, 124)  
 c. 阿波夢登茹於謀賦 「む」 平平去平上平平去 LLHL LLLH (16, 89)  
 d. 耶黎夢之魔柯枳 「む」 平平去平平平上 LLHL LLLH (16, 91)  
 e. 倭柁羅務騰 「む」 平上平去平 HHHHL (24, 106)

<sup>6</sup> 早田 (1977) は助詞「や」, 「そ」, 「も」, 「よ」下降調と推定している。桜井 (2000 : 64-69) は, 助詞の文法的機能とアクセント型に密接な関わりがあることを指摘し, 係助詞は下降調と結び付けている。

<sup>7</sup> 「まで」が格助詞としてもとりたて助詞としても用いられることや, 助詞 *ba* が東北や九州など本土方言では対格助詞なのに対し, 琉球諸語 (の一部) ではとりたて助詞になっているなど, 助詞の種類が変わることはあり得る。「は」は格助詞ではないものの, 「が」との使い分けが問題となるように, 基本的には主格に付く。統語的には「も」も「は」と類似するが, 少なくともアクセントは現代方言でも異なっており, 何らかの違いがあったと考えられる。なお, テ形を作る「て」も, 通時的に F > H とアクセントが変化した可能性がある。

未然特殊形のアクセント<sup>8</sup>を取る例として、のように尊敬「し」、打消推量「じ」、推量「む」等が挙げられる。ただし、高起式動詞に接続する「む」は、H…Hとなっている点から、形容詞の終止形や連体形の語尾のように独立的だった可能性もある（一語化していればH…Lとなるはずである）。

#### 4. 考察

3節での結果を(4)にまとめた。ここではさらなる考察を試みる。

- (4) a. 去声字の分布の偏りが歌謡のみならず訓注にも見られることから、語末への偏りが単純に歌謡の詠み方を反映するわけではないと考えられる。
- b. 重出語の中には万葉仮名に声調の交替が見られるものがあり、交替には上声→去声→平声という傾向がある。
- c. 地名や枕詞には去声字が3字以上連続するものが見られる。
- d. 1拍助詞で去声字が複数用いられたのは「は」、「も」、「や」で、いずれも係助詞であるという共通点がある。助動詞には、語末として扱った方が良いものがある。

(4b)の去声字は長さを表すか不明だが、歌謡の旋律を反映する要素と考えられる。交替が語頭を中心に生じているのも、(4a)の語末の去声字とは異なった原理に基づくと考えられる。(4c)は地名と枕詞の共通点を考えると、非母語話者に耳慣れない語という点が浮かぶ。α群が中国人によって書かれたなら、歌謡の旋律というより、非母語話者に向けた発音の反映ではないかと思われる。そうであれば、可能性が高いのは長さである。(4d)は、「は」が「も」、「や」と共通の音声的特徴を持っていたことを示唆するもので、少なくとも現代諸方言からは推定が困難で、文献研究からその可能性が示された点で重要と考える。(4b)の去声についても、(4c)と(4d)からやはり長さに関連付けて考えたいが、上声→去声→平声という傾向は、3段階の高さの違いを表すかもしれない。(4c)と長さとの関係については現在の音声言語からの推定である。以上から、「紀」α群の万葉仮名は、非母語話者である中国人が、その場でうたわれた歌謡を、内容を理解しながら書き起こしたものと推定される。

#### 参考文献・資料

- 奥村三雄(1995)『日本語アクセント史研究』東京：風間書房。
- 金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究—原理と方法』
- 桜井茂治(2000)『日本語の音・考—歴史とその周辺』pp.712. 東京：おうふう。
- 高山倫明(1981)「原音声調から見た日本書紀音仮名表記試論」『語文研究』51.
- (1982)「書紀歌謡音仮名と原音声調」『文献探求』10.
- (1983)「日本書紀の音仮名とその原音声調について—上代アクセントとの相関性を考える」『金田一春彦博士古稀記念論文集』1 東京：三省堂。
- 中澤光平(2011)『『日本書紀』α群の万葉仮名における去声字の特異な分布』第105回訓点語学会研究発表会発表資料。
- 早田輝洋(1977)「生成アクセント論」『岩波講座 日本語5 音韻』:325-360. 東京：岩波書店。
- 森博達(1977)「『日本書紀』歌謡における万葉仮名の一特質」『文学』45-2.
- (1991)『古代の音韻と日本書紀の成立』東京：大修館書店。
- (2003)「日本書紀成立論小結—併せて万葉仮名のアクセント優先例を論ず—」『国語学』54: 1-15.
- 頼惟勤(1951)「漢音の声明とその声調」『言語研究』17・18: 1-46.
- 岩崎本(日本書紀) 秘籍大観『日本書紀 卷之部』(1926) 大阪毎日新聞社
- 凶書寮本(日本書紀) 宮内庁書陵部本影印集成1-3『日本書紀』(2005-2006) 八木書店

<sup>8</sup> 高起式はH…H, 低起式はL…Lと、平板型のアクセントを指す。低起式の未然形一般アクセントはL…Hである。